

宇多津町平山公園ビオトープについて

香川県宇多津町役場建設課 係長 中村 玄志

1. はじめに

宇多津町は香川県の中央部に位置する温暖な気候の瀬戸内海に面した町です。雨が少なく晴天の日が多い気候を利用して、塩田による製塩業が古くから栄えました。その塩田も瀬戸大橋架橋にあわせて、区画整理され、今では新しい市街地が広がっています。香川県では数少ない人口が増加している自治体である一方、郊外の市街化も進んでおり、典型的な水田風景やそこに住む生物は失われつつあります。

河川の水辺とはいうと、まちの中央部には大東川が、そして東部には支流の古川が流れていますが、降雨が少ないため流量は少なく、夏の渇水期には干上がってしまうこともしばしばあり水生生物にとっては過酷な環境となっています。総じて町民が親しめる水辺は少ないのが現状です。



写真-1 宇多津町市街地と瀬戸大橋
—平山ビオトープは写真右端中央部付近—

2. 水辺施設の整備

今回紹介する平山公園ビオトープは、都市化が進み、水辺にふれあう施設が少ない宇多津町に、生物を観察し、環境意識を高めてもらう場所をつくろうという試みです。当地は、かつて湿地であり生物の貴重な生息場所でした。それがいつしかゴミと汚水の集まる場所となり、例にもれず埋め立てられ公園として開放されていました。しかし、地域住民にとって本来田園に生息していた生物や植物は徐々に馴染みの薄いものとなっていました。そこで（財）リバーフロント整備センターが（財）日本宝くじ協会の助成を受けて行っている「水辺施設の設置事業」により、在来の生物や植物が繁殖し観察できる平山公園ビオトープを整備していただきました。



写真-2 整備前の平山公園
—動植物が棲める環境ではない—



写真-1 大東川水系古川
—市街化により減少する田園—

3. 施設説明

細長い公園の形を利用して全長約77mのビオトープを計画しました。目標は『かつて宇多津の田園で見ることのできた生物が生息できる場所づくり』とし、大きく、上流、中流、下流に分け、途中にワンドや瀬、淵を設け多様な環境の創造に努めました。

動植物の選定は生息が持続できるようにと在来のものでも環境の変化に強いものを選び、少しでも県絶滅危惧種に指定されている種を増やしてみようを試みることにしました。生物はメダカ、カエル、トンボ、ゲンゴロウなど、植物はヨシ、イ、ガマ、ミクリなど、かつてはどこでも見られたものです。

ここでいくつかの問題が生じました。ひとつめは香川県には希少野生生物の保護に関する条例があ

り、指定されている希少野生生物の採取・移動は罰金の対象となるという問題です。あれこれ検討した結果、指定種の入手は条例施行前から栽培している方から株分けをしていただくことで条例をクリアすることができました。

次に、夏期の水温上昇の問題です。水温の上昇は生物にとって生死に関わることから、循環水を冷やす必要がありました。地下にタンクを設けビオトープを一度通過した水を一旦冷やし、地下パイプを通過中にまた冷やし、ビオトープ上流に戻す方法をとりました。また、加水には地下水を利用しました。今のところ平成21年夏に生物の減少は確認されませんでした。

最後の問題は外来種対策です。当初、ビオトープ水は古川から導水する計画をたてていましたが、宇多津町周辺ではスクミリンゴガイ（通称ジャンボタニシ）が非常に繁殖しており、古川の護岸も卵でピンク色の斑点が多数見られ、早期に占領されること間違

いなし！ということで断念しました。しかし、土に混ざってジャンボタニシが侵入することは十分予想されることであり、職員と住民ボランティアで、こまめに取り除く以外の方法はないと覚悟しています。

4. 整備効果

もともと自治会活動の盛んな地域で、地域住民により花の植え替えや清掃が行われていました。施設整備後、地域住民の『おらが公園』意識はさらに盛り上がり、ビオトープ周辺の花の植替えはもちろん、ジャンボタニシ退治など熱心に取り組んでいただいています。

動植物を観察する子供たちの姿も見えるようになり、少し淋しかった公園がにぎやかになりました。

今後は地域住民と環境に対する認識を高め、動植物の保護や管理を協同で楽しく実施できればと思います。ワンドや瀬の維持などこまめに手を加えるなど、まだまだビオトープづくりは続きます！



写真-3 ビオトープ最下流
—地域住民が季節の花を植栽—



写真-5 ビオトープ中流
—浅瀬と深みがあります—



写真-4 ビオトープ下流
—木柵による護岸—



写真-6 ビオトープ上流
—ごつごつした石により河川上流部を表現—